

コウノトリの郷

二〇〇五（平成一七）年九月二十四日、「兵庫県立コウノトリの郷公園」で五羽のコウノトリが豊岡の空に放鳥された。約三千五百人が見守る中を、一羽、また一羽とコウノトリが空に舞っていく。

「わあっ」という歓声が響いた。空を見上げる人々の表情は感動に満ち、輝いていた。

コウノトリを絶滅から救うために人工飼育に踏み切ったのが一九六五（昭和四十）年。二十四年後の一九八九（平成元）年、ようやくにしてヒナがかえり、その後ヒナが順調に増える見込みができた時、「野生復帰」に向けたプロジェクトが動きだした。その一つとして、「コウノトリの郷公園」の建設が計画された。

コウノトリは翼を広げると二メートルにもなる肉食性の大型の鳥で、たくさんの食べ物が必要とする。しかし、当時の但馬の里山や田んぼの様子、農業のやり方は、コウノトリが野生で生息していたころとはまったく違っていた。そしてなによりも、川や田んぼでエサとなる魚やカエルを採すため、農家にとっては「稲を踏む害鳥」であるという問題があった。

野生復帰など夢物語だと、だれもが思った。

人工飼育に踏み切ってから放鳥まで四十年の時を必要とした。長い歳月だった。この間、人工飼育に情熱を注ぎ続けた人、東京から豊岡市に家族で移り住んで野生復帰を支えた研究者、ふるさととコウノトリのために奔走した地元の人たち、行政関係者……。数え上げればきりのないたくさんの人々の夢と情熱が、コウノトリの野生復帰への道を支え、一人一人にかけがえのない物語が生まれた。

そしてこの日、実る稲穂に影を映し、空を舞うコウノトリを、見上げている人がいた。

祥雲寺地区に住む稲葉哲郎さんは東京の大学を卒業し、東京で十年近く働いていたが、都会の生活になじめないものを感じて豊岡に帰ってきた。一九七〇年代のことである。稲葉さんは豊岡に戻って久しぶりに実家の農作業を手伝った。しかし、そのあまりの変化に驚きとまどいを感じた。手作業だった田植えや稲刈りは、機械化が進み格段に楽になっていたし、農薬を使うことで害虫は駆除され、稲の病気も減り、米の収穫量は大幅に増えていた。

「しかし……」と、稲葉さんはいぶかった。どこか昔の田んぼと違うような気がしてならない。雑草もなく、稲が美しく成長してはいるが、このふるさとの情景がどこか自分にはよそよそしく感じられた。

ある日、農薬を散布し終えた田んぼで、思わず息をのんだ。カエルや魚が白い腹を見せて、たくさん浮かんでいたのだ。

「そうか、そうだったのか。」

昔と何かが違うと感じたのは、田んぼにいるはずの生き物がいなくなっていたからだった。

あぜ道でうるさいほど飛び交っていたバツタは、数えるほどしかない。夜はカエルの鳴き声の大合唱だったのに、それもほとんど聞くことはない。夏の夕やみにほめくホタルの光も、めつきり少なくなっていた。

子供のころは、楽しかった。ウナギ、ナマズ、コイ、トンボ、バツタ……。いつも山や川で友達と遊んでいた。暮らしの中に数え切れないくらい生き物がいた。

昔の思い出からふと我に返り、白い腹を見せるカエルの無残な姿にもう一度目をやった稲葉さんは、はっとした。私たちが食べる米は、このカエルを、こんなふうにしてしまっ「水」を吸い上げて育つ稲ではないか。これでは田んぼの生き物の命だけでなく、人間の生命にも害を及ぼすに違いない。農業は人間の「いのち」を支える仕事だ。だとしたら、このようなやり方を続けていいはずがない。稲葉さんはそう思った。

しかし、定着して安定しつつある農業のやり方を変えるのは、よほどの勇氣と覚悟がいることだった。稲葉さんは、何をどうすればいいのか、その答えを求めて、考え続けた。

「コウノトリの郷公園」建設の候補地として祥雲寺地区の名があがったのは、稲葉さんがそんなことを考えている時だった。

地区の人たちにとって、これは悩ましい問題であった。

コウノトリは稲を踏み荒らす害鳥ではあったかもしれないが、一方で、豊岡の農家の人たちが誇らしさや懐かしさを抱いているふるさとの鳥だった。

「日本では絶滅したコウノトリが、自分たちの住む土地でまたよみがえるのか」と考えると心は揺れる。けれど、人と自然が共生することが目的の公園を建設するということは、ただ土地を提供するということだけではない。コウノトリが生きていくための環境を考えた農業のやり方を工夫していかなければいけないということだ。近代的な米づくりの方法によって、田んぼも整備され、昔の重労働からも開放され、安定した収穫が得られるようになって今、反対する気持ちがわき上がってくるのは当然だった。

地域の農家の人たちと、「コウノトリの郷公園」についての話し合いが始まった。稲葉さんはそこで、日ごろ自分が農業について考えていることを思い切って口にしてみた。すると、効率だけを目ざす農業ではいけないと考えている人が他にもいることが分かった。ただ、どうすればいいのかがだれにもわからない。そこで、まずは「環境にやさしい農業」について勉強してみようということになった。何度も勉強会を開き、話し合いをもった。決断に至るまで二年間、あらゆる事柄について話し合った。絶対の自信はないが、とにかく公園の話を引き受け、自分たちの地域づくりをしていこうという気持ちが、固まった。

「これできつと、変わる。」

稲葉さんは、ふるさとに帰ってきた時のことを思い出していた。

話が決まると、区長さんや稲葉さんを含めた有志の人たちは研究会を立ち上げた。

稲葉さんたちは、「郷公園と一体的な活動を推進し、コウノトリと共に暮らせる環境を創ることとは、そこに住む人間がすばらしい自然環境を取り戻すことになる。その結果として、生産された農産物は人間の生命を守る食の安心・安全につながる」という考えを柱として、活動を進めることにした。

この考え方に沿って、さまざまな試みがスタートした。土地の整備が行われた。朝市の会も発足した。そして、二〇〇二（平成十四）年には祥雲寺地区全戸加入による営農組合が結成され、農業のやり方を地区一体となって考える仕組みもできた。農業だけではなく、人々の心も、少しずつ変わっていった。

二〇〇三（平成十五）年になって、稲葉さんは、無農薬・無化学肥料栽培の米づくりに初めて挑戦をした。農業の指導員が協力してくれたが、それでも夏になると田んぼにはコナギとクログワイという雑草がびっしりと生えた。

「やっかいな草が生えてしまった。なんとか取らなくては。」

しかし、半日かかっても、取り除けたのはたったの一分だけだった。

「全部を取り除くのにいったい何日かかるんだろう。農薬を使えば三十分で事は済むのだが……。」

思わずため息が出た。しかし、稲葉さんは農薬を使わなかった。ひたすら夏の田んぼで草取りをした。指導員の方たちも手伝いに来てくれたが、すべての草を取りきるのに二十日かかった。想像していた以上に無農薬栽培は大変なことだと、身をもって感じた。

だが、秋になって驚くことが起こった。稲を刈りはじめると、あちらの株からもこちらの株からも、カエルがいつせいに跳び出してきたのだ。いったいどれだけいるのか、このごろでは見たこともないカエルの大群だった。

「これなら、コウノトリは戻ってくるができる……。」

稲葉さんは、飛び跳ねる田んぼのカエルを眺め、思わず笑みがこぼれた。

その年の田植えから収穫まで、周りの人々は、稲葉さんたちが苦労して作業している様子を否定的に見ていたに違いない。ところが次の年から、新たに無農薬栽培に取り組む人が現れた。稲葉さんたちのやり方を見ていて、手間もかかり不安もあるが、自分たちの健康や将来の子供たちのためにとなると共感したのだという。

こうして、コウノトリと共に暮らすための地域づくりが少しずつ、一歩ずつ、しかし確かな足取りで進み始め、ついに放鳥の日を迎えたのである。

放鳥から五年がたった豊岡は、コウノトリがいることが当たり前の町になっていた。

豊岡市の農家の取り組みは、「コウノトリを育む農法」として全国から注目されるようになってきた。難しいと考えられていた無農薬栽培についても、工夫と研究が進んだ。

「害鳥と考えられていたコウノトリが、人間にたくさんのかんことを教えてくれたのだ。」

稲葉さんは、そう思った。

「農業も、自然も、奥が深いです。」

川ではしゃぎながら魚をとっている子供たちがいる。田んぼには、えさをついばむコウノトリの姿がある。今では当たり前になりつつあるそんな光景を、稲葉さんは感慨深く見つめて言った。

「まだまだ、これからですね。」

そのひとみも表情も、さわやかに輝いていた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。